

「国立青少年教育施設における傷病の概況」（令和3年度調査）で分かったこと

夏休みは自然の中でいっぱい遊ぼう！

でも、思わぬ事故やけがにはご注意を！

待ちに待った楽しい夏休み。コロナ禍で活動を控えていた方も、今年こそは伸び伸びとした夏休みを過ごしたいと思っている方も多いのではないのでしょうか。

でも、久々に活動される際は、思わぬ事故やけがにご注意ください。国立青少年教育施設で発生した傷病の状況を検証したところ、新型コロナウイルスの流行で活動を控えていた団体の活動が戻りつつあるなか、今までは起きていなかった事故や思わぬけがが増えている傾向がみられました。

例えば、「創作活動」によるけがが増えています。けがをした時の状況をみると「グルーガン（ホットボンド）やバーナーでやけどした」「彫刻刀や小刀で指を切った」といった軽微なけがが多くなっていたり、野外炊事では「指導とは違う方法でやって指を切った」「熱い鍋を触って軍手がとけた」「濡れたぞうきんで熱い鍋を持ってやけどした」など、安全指導を守れず、失敗しているケースが複数みられています。

このような状況の要因としては、活動を控えていたことで、子どもだけでなく、指導者も活動に対する理解や経験が不足していたり、経験があっても指導の感覚や危険に対する感受性が鈍っていたりすることが考えられます。それにより、安全管理が不十分となり、今までであれば気づいていた危険な行為や状況に気づかず、軽微なけがにつながったり、安全指導を守れていないような状況が起きているのではないかと推察されます。

安全は楽しい活動の第一歩。この夏の活動に向けては、新型コロナの流行以前とは状況や感覚が異なることを意識し、安全・安心な活動を心がけるようにすることが大切です。

### 安全・安心な環境づくりのポイント

- ・活動前の安全指導（どのようなけがが起きやすいのか、それはどうすれば防げるのかをイメージしやすいように、具体例を交えて分かりやすく説明する等）を徹底し、参加者の安全意識（自分の身は自分で守る、他の人の安全にも気を配る等）の向上に努めるようにする。
- ・活動前だけでなく、活動中も事故やけがの予兆を見逃さないよう危険の発見、把握に努め、状況に応じて適切な安全対策を行うようにする。特に、活動の後半は慣れや疲れ等で気が緩みやすくなるため、参加者に適宜声をかけたり、休憩をとるよう指導することが大切。

### 活動前のチェックリスト

- 活動場所で危ないところがないか、使用する用具に破損がないかなどを点検しましたか？
- 気象情報を確認しましたか？
- スタッフ間で情報共有はできていますか？
- 子供たちは活動に適した服装（をしていますか？また、持ち物も確認しましたか？
- 体の調子が悪い子供や気分がすぐれない子供はいないか、活動前に確認しましたか？
- セーフティトーク（安全指導）を行いましたか？

【問い合わせ先】国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター  
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3番1号 TEL:03-6407-7741/FAX:03-6407-7619

# 国立青少年教育施設における傷病の概況（令和3年度調査）

## ＜調査結果の概要＞

本調査は、各教育施設（国立オリンピック記念青少年センターを除く）で発生した傷病や事故の状況を把握し、その傾向や要因を検証することで、施設の安全管理の改善や安全対策の充実に資する基礎資料を得ることを目的に毎年実施している調査になります。

令和3年度調査の結果では、新型コロナウイルスの流行等により、ここ数年、活動できていなかった利用団体については、指導者・引率者による安全管理が不十分となり、今までだったら気づいていた危険な行為や状況に気づかず、軽微な負傷につながったり、安全指導を守れていないような状況が起きているのではないかとということが示唆されました。

今後の安全対策としては、新型コロナウイルスの流行以前とは状況が異なり、利用者の活動に対する理解や経験などが不足していることを前提に、研修支援における安全管理や安全指導（事前打ち合わせやセーフティトーク等）の内容を点検し、必要に応じて改善を図る必要があると考えられます。

## 調査結果のポイント

※以下は負傷の概況を掲載しています。疾病の概況や調査結果の詳細につきましては報告書をご覧ください。

### 1. 施設で発生した傷病の概況

令和3年度の国立青少年教育施設（国立オリンピック記念青少年センターを除く27施設）の利用者数は約86万人で、そのうち傷病の発生件数は985件（負傷491件、疾病494件）で、前年度（434件）に比べ、551件（負傷300件、疾病251件）増加\*した。

※前年度は新型コロナウイルスの流行により利用者数が大幅に減少したが、令和3年度は利用者数が回復傾向にあることから、傷病の発生件数の増加もその影響を受けていることに留意する必要がある。

### 2. 負傷の概況

負傷で多かった症状は「打撲」（90件）で、次いで「きり傷」（73件）、「ねんざ」（67件）であった。症状ごとに負傷した部位と負傷の要因をみると、それぞれ多かった部位や要因は表1-1のとおりである。

表1-1. 負傷の症状別にみた負傷した部位と負傷の要因（上位3項目）

症 状	部 位	要 因
1. 「打撲」 (90件)	1. 「頭」(35件) 2. 「手・指」(12件) 3. 「顔」「足・指」(8件)	1. 「不注意(本人)」(49件) 2. 「注意不足(指導者)」(25件) 3. 「不慣れ(本人)」(21件)
2. 「きり傷」 (73件)	1. 「手・指」(47件) 2. 「顔」(12件) 3. 「頭」(7件)	1. 「不注意(本人)」(35件) 2. 「不慣れ(本人)」(34件) 3. 「注意不足(指導者)」(26件)
3. 「ねんざ」 (67件)	1. 「足首」(60件) 2. 「手首」(4件) 3. 「首」「膝」「足・指」(1件)	1. 「不注意(本人)」(30件) 2. 「不慣れ(本人)」(21件) 3. 「失敗(本人)」(20件)

### 3. 負傷の発生件数・割合の推移（前回調査との比較）

#### （1）症状別負傷発生件数・割合の推移

症状別にみると（表 1-2）、令和 3 年度は「打撲」（90 件）の順位が上がった一方、これまでの調査で上位にあった「虫さされ」（53 件）の順位は大きく下がった。なお、平成 30 年度調査、令和元年度調査では「打撲」が一位であったことから、前回調査で下がった順位が再び上がった状況になっている。

表 1-2. 症状別負傷発生件数・割合の推移（上位 10 項目）

令和2年度(前回調査)				令和3年度(今回調査)			
順位	症状	件	%	順位	症状	件	%
1	虫さされ	36	18.8	1	打撲	90	18.3
2	きり傷	34	17.8	2	きり傷	73	14.9
3	打撲	30	15.7	3	ねんざ	67	13.6
4	ねんざ	22	11.5	4	やけど	59	12.0
5	すり傷	17	8.9	5	虫さされ	53	10.8
6	やけど	12	6.3	6	すり傷	39	7.9
6	骨折	12	6.3	7	骨折	30	6.1
8	さし傷	9	4.7	8	さし傷	22	4.5
9	靭帯損傷・断裂	3	1.6	9	突き指	13	2.6
9	脱臼	3	1.6	10	鼻血	5	1.0
9	鼻血	3	1.6				

#### （2）活動内容別負傷発生件数・割合の推移

活動内容別にみると（表 1-3）、「スポーツ活動（野球、サッカー、テニス等）」（90 件）、「野外炊事」（66 件）、「自由時間」（38 件）の負傷が上位を占める傾向は変わらないものの、令和 3 年度は、前回調査に続き、「創作活動（クラフト等）」（42 件）による負傷の順位がさらに上がった。一方、これまで上位にあった「登山・ハイキング」（34 件）による負傷の順位は大きく下がった。

活動内容ごとに発生した負傷の症状をみると、スポーツ活動（野球、サッカー、テニス等）では「ねんざ」（24 件）、「打撲」（17 件）、「突き指」（10 件）、野外炊事では「やけど」（32 件）、「きり傷」（19 件）、「虫さされ」（8 件）、創作活動（クラフト等）では「きり傷」（19 件）、「やけど」（14 件）、「さし傷」（5 件）による負傷が多くなっていた。

表 1-3. 活動内容別負傷発生件数・割合の推移（上位 10 項目）

令和2年度(前回調査)

順位	活動	件	%
1	登山・ハイキング	30	15.7
2	スポーツ活動(野球、サッカー、テニス等)	26	13.6
3	自由時間	21	11.0
4	野外炊事	20	10.5
5	創作活動(クラフト等)	19	9.9
6	移動中	17	8.9
7	アドベンチャープログラム・インシアティブゲーム	8	4.2
8	オリエンテーリング・ウォークラリー	7	3.7
9	キャンプファイヤー・キャンプセレモニー	4	2.1
9	自然観察	4	2.1

令和3年度(今回調査)

順位	活動	件	%
1	スポーツ活動(野球、サッカー、テニス等)	90	18.3
2	野外炊事	66	13.4
3	創作活動(クラフト等)	42	8.6
4	自由時間	38	7.7
5	オリエンテーリング・ウォークラリー	35	7.1
6	登山・ハイキング	34	6.9
7	移動中	29	5.9
8	アドベンチャープログラム・インシアティブゲーム	14	2.9
8	キャンプファイヤー・キャンプセレモニー	14	2.9
8	研修・学習活動	14	2.9
8	就寝時間(起床時も含む)	14	2.9



## 負傷の特徴と安全対策

### <負傷の特徴>

- 負傷の多かった活動は「スポーツ活動(野球、サッカー、テニス等)」「野外炊事」「創作活動(クラフト等)」で、「スポーツ活動(野球、サッカー、テニス等)」ではねんざ、打撲、突き指が多く、「野外炊事」ではやけど、きり傷、虫さされ、「創作活動(クラフト等)」ではきり傷、やけど、さし傷による負傷が多くなっている。
- 活動で負傷した時の主な状況をみると、スポーツ活動(野球、サッカー、テニス等)では「サッカーの練習中にスライディングをして手を骨折」「タグラグビーで方向転換した際にひざをひねり、靭帯を損傷」、野外炊事では「薪割りの際、指導とは違う方法でナタを使用して手を切った」「調理中に鍋の取っ手を持つとした際、軍手が溶けてやけど」、創作活動(クラフト等)では「グルーガンを使用中に指をやけど」「スプーン作りで持ち手を削っている時に支えていた左手を切った」といった状況で負傷している。

### <今後の安全対策>

#### (研修支援における安全管理や安全指導の点検・改善)

- ここ数年、活動できていなかった利用団体については、子どもだけでなく、指導者・引率者自身も活動に対する理解や経験が不足していたり、経験があっても指導の感覚や危険に対する感受性が鈍っていたりすることが予想される。それにより、指導者・引率者による安全管理が不十分となり、今までだったら気づいていた危険な行為や状況に気づかず、軽微な負傷につながったり、安全指導を守れていないような状況が起きているのではないかと推察される。
- 施設においては、新型コロナウイルスの流行以前とは状況が異なり、利用者の活動に対する理解や経験などが不足していることを前提に、研修支援における安全管理や安全指導(事前打ち合わせやセーフティトーク等)の内容を点検し、必要に応じて改善を図る必要がある。

#### (活動前・活動中の安全指導の徹底と状況に応じた安全管理や安全対策の実施)

- 負傷の要因の大半は「本人」の要因(不注意、不慣れ、失敗等)が占めているものの、「指導者・引率者」の要因を指摘する回答も2割弱あることから、指導者・引率者等は以下の点に留意する必要がある。
  - ・入所時や活動前の安全指導(施設ではどのような事故やけがが起きやすいのか、それらはどうすれば防げるのかをイメージしやすいように、具体例を交えて分かりやすく説明する等)を徹底し、利用者の安全意識の向上に努めるようにする。

- ・活動前だけでなく、活動中も事故やけがの予兆を見逃さないよう危険の発見、把握に努め、状況に応じて適切な安全指導や安全対策を行うようにする。特に、活動の後半は慣れや疲れ等で気が緩みやすくなるため、参加者に適宜声をかけたり、休憩をとるように指導する。
- 施設では、事前打ち合わせやプログラム体験会等の際に、施設で起きやすい事故やけがとその安全対策をきちんと説明し、利用団体の指導者・引率者が適切な安全管理や安全指導を行えるように支援する。その際、指導者・引率者の人数や体制だけでなく、活動に対する理解や経験なども確認し、利用団体の状況に応じた支援を行うようにする。